

貞一の日記(承前) (明治廿六年五月)
(拔萃) 生男(兒)

その母

八月十二日 渡邊の伯母さんの家まで、歩いて行き、歩いてかへる、途中千里軒といふ牛乳店の前まで行きし時、「モーチ、カヒ〜」といつてずん〜入り込む、店に主人在り、よくおぼえて居ましたねといつて、五合入の瓶をくれる、喜んで持ちかへる、

八月十三日 白き海軍形の帽子の、古くなりて破れしを何時の間にか持ち出して、金だらひの水にて洗ひ居りしが、中よりボール紙クシャ〜になりて 出でしを見、ウンコ〜といつて、氣味悪るそうに、手を引き込める

ヨル、マツク、ソラ、ホシ、デル、と續けていふ 貞一にしては、余程長き話なり、

此頃時々「かわさんかうちゐる」といつて嬉しそうな顔をす、夏休みにて、母が終日家に居る故なり、

八月十五日 今日父秋田地方へ出立す、

午後より母と散歩す、到る所の門の前に立ちて
 コメン〜アケ〜といふ、

八月十六日 朝おきて トーサン、キナイと不思議相な顔をなす、あしたも〜、おとーさんゐないよと、いへばわかりしか、ワツと泣き出す、散歩に出でし時、砂利をしきたる所に立ち、足踏みならして、サレインシのと唱ふ、砂利を見ればいつもかくいふ、

母と安田さんと三人にて、王子の印東様に行く
 文子さん、忠男さん、大に歓迎して、花園をあちこちと案内して、花をとりにくれる、貞一

は一向かちう浮うき立たたず オウチカヘロー〜とばかりいふ、歸途きと染井そめいの墓ぼ地ちを 通とほるに淋しみしき故ゆゑか

オウチカヘロー〜といつて、泣なき聲こゑを出だす、

八月十七日ごわつにち 朝床あさこしの中ちゆうにて、父ちちさんのおみやに、

何をなにいたゞくのとさけば、花はなといふ、晝頭ひるさうは、

菓子かしといふ、何か物音ものおとをき、又また人の立たち上ある

を見て「父ちちサンオカヘリ」と 玄關げんくわんへとび出だし

トーサン〜とよぶ

母ははと安田やすださんと三人さんにんにて、太陽堂たいやうどうへ晝端書ははがきを買か

ひに行く、電車でんしゃと涼車すずしゃのを見つめて、大騒おほさわぎ故ゆゑ

買かひてもたせしに、獨ひとりり椅子いすにもたれて、チン

〜ゴ〜、ゴケンチヨ〜などいひて遊あそ

び居ゐり、

八月十九日ごわつにち 昨夜さくや静子しづこ泊とまりし爲ため 今朝眼こんてらめさめて 床とこの中なかにてフン〜云いひ出いさんとせしも、静子しづこ

傍そばより ニユツと顔おもてを出だせば、機嫌きげんなをり大喜おどろこ

びなり、

八月廿三日ごわつにち 小原先生こはらせんせいの所ところへ行き、体た量りを見みて頂いた

く 一〇七〇、〇瓦がらんあり、轉地てんちの事こと、大洗おほあらひ、平

磯邊いそへんは如何いかと伺うかひ、彼の海岸かひがえは大人おとなの避暑ひしよには

よろしけれど、小兒せうにには余あまり寒さむき風吹かぜく故ゆゑ よ

ろしかるまじとの事ことなり

下痢げり二回くわい 牛乳ぎゅうにち 一日いちにち二〇〇瓦がらんに減げんぜらる、

八月廿五日ごわつにち 朝食前あさうけに、少すこしく水みづを吐はき、終日しゆうじつ元

氣きなし便通べんつうなし

八月廿六日ごわつにち 薬くすりを飲のみませんとすればイラナイ〜

と泣なく此この語ことばは初はじめてなり、

格子からしのあく音おとすれば、トーサン、といつて玄關げんくわん

にとび出だす、

牛乳ぎゅうにち四〇〇瓦がらんに増ます、

便通二回 形あり、

八月廿七日 父帰宅

八月廿八日 父母と電車にのりて大森に行く、大

喜ひにて始終目を丸くキヨロくして 外を見

て喜ぶ、

大森海岸魚榮に一泊、電車にのつておうちかへ

ろうといつて泣く、

坐敷の壁の中に砂のキラキラ光るを見て、ホシ

く(星)といふ、

八月廿九日 電車にのりて、羽田浦の要館に行

く 二三日滞在のつもりなり、

海岸に行き、船を見て軍艦くといひ、水澤山

手々わらふといふ、

砂原をハダシにてかけまわりて喜ぶ

八月卅一日 帰宅

九月二日 今朝より熱あり、咳少し出づ、元氣悪

しく、喰べたがつては泣く、

吸入器を出して、試みたれども、余り小さくて

工合あしき故、父買ひに行く、吸入させれば、

いやがつているく文句をいふ、キライ、モ一

ジキ、デナイく等 いろくの語をならべる

便通なし 体温 卅八度四分(午後七時)

九月三日 咳少しよくなれり、元氣も左程あしか

らず 小原先生の診察をうく、

便通形あり、一回

九月九日 安田さんに、ピアノを弾いてもらひ、

君が代をうまく、詞も節も 唱ふ、ばあや 聴

いて居て、上手とほめしに、其後も ばあやが

聴いて居なければ 唱はずといふ、

九月十七日 父母と動物園に行き、象を見て、象

頂戴といつて手を重ね、水鳥を見て、コワイと泣き聲になる、他の動物も皆こわがる 馬は

いつも見馴れしもの故、平氣なりき。

九月廿三日 馬術練習所へ行き、馬を見て、オウ

マスキチヨーダイ、ハイイ、デンシヤミタイ、

ボーシハイ といつて、自分の帽子を、馬にやらんとす。

十月三日 ビーマーチの事を、ヒバチ〜といふ

ねむくなりし時、ピヤノ、ヒバチ、コン〜といつて、安田さんに弾ひてもらひながらねむる

十月八日 父と電車にて、御茶水橋の小林に行き

寫真をうつす、電車を見れば、狂人の様になつて、電車早くイラツシヤイ、父サンカケテ、電車

車イッテシマフと大騒なり、

十月十八日 毎日〜電車〜と、電車なくては

夜が明けぬなり、電車の繪を書いてくれると、

誰でも氣に入るなり、書きかけると、何時までも、書いて〜といつてせめる、玩具には電車

三つあり、それをならべては、チン〜ゴ〜といつて動かす、又は「電車ツナグ」といつてつ

なぐ、繪端書屋に行けば、電車はがきといつて必らず買はせる、此頃は六七枚も持つて、時々

獨りて持ち出しては楽しんで居る。

時には仰向けにねて、足にてつつぱりながら、

チン〜ゴ〜といつて、身体を押して行く

父の在る時は、父にもせよとて、父を大きい電車、自分をチツチャイ電車といひながら、二人

併んで、座敷中を轉がり、終には、父の腹の上に乗つて動かす、外を歩く時も、全し様に、電車

車になり、チン〜ゴ〜といつては、走つ

て行き、時々止つては、上野など獨りでいひ、
 又は電車こわれたといつて動かす 側へ行つて
 身體にさわつて「直つた」といへば 又チンク
 ゴーくとかげだす

十月廿六日 小原先生の許に行き、体量を見て頂
 く 一一、四五、〇瓦あり、

夏頃は、自分と同じカーキ色の、帽子を冠れ
 る兒童を見ると、イキナリ自分のをとつて、さ
 し出しながら、オンナシ ボーシくといつて
 大よろこびなりしが 此頃は 全し様な靴を、
 着けたる兒童を見れば、側に行きて、全し靴く
 といつてくらべる。

十月卅日 十一時打つと、ばあやが、晝の御膳だ
 てをする、其音をきゝて、誰もいはぬに、ピヤ
 ノの室に、一パイ、ひろげてある繪や玩具を

大急ぎにて 片付ける事毎日なり、安田さんが
 いひつけて、片付けさせしは、只三日間なりき。

十一月三日 此頃漸く滑稽の動作をなす、星を見
 て、星を取ろうと云ふ故、お取りといへば、手を
 伸べて取る真似をなし、御父さんに上げようと
 父に渡す真似をなす、何か貞一の知らぬ物をさ
 して、これ何とさけば 考へて 「マンマ」とい
 ふ、「マンマ」なら、御上りといへば微笑しなが
 ら、喰べる真似をなす、

十一月十四日 今日 陛下伊勢路に行幸の日な
 り、午後 茶の間にて、茶棚の上にある菓子皿
 を見つけ、父にむかひ、しきりに、オモチャ、
 チョーダイといふ、黙つて見て居れば、遂に足
 をつまだて、取り下ろし何も入つて居らぬを
 見て、さも失望したらしく、カラツボといつて

又元へ返へし置けり、これは 此間他所の人に
おもちやになさいと ビスケツト頂きしより、
ビスケツトを オモチャ〜といふ様になりし
なり。

十一月卅日 ツナグといふ語、大變氣に入りて、
小原先生と佐々木先生とつなく、腰巻とはらま
きとつなく等おもしるさ節をつけていふ、

十二月四日 自分を指して、コレオイシヤサマ
といつて、母の胸をたたく、側より父が、これ
は佐々木先生かといつて、貞一の頭をさはると
貞一とぼけた顔してコレオツムといふ、それじ
やこれかと 肩をさはればコレオベ〜とすます
十二月十日 午後母と村井に行く途中、凱旋兵を
歓迎の旗たてたるを見て、コワイ〜と大急ぎ
にて そこを走る

十二月十三日 ウエファースと貞チャンの口とつ
なぐといふ故、ウエファースと、父さんの口と

つなぐといふと、イヤ〜と口を抑へに来る
十二月十七日 馬上さんより さつま芋を澤山に
頂く さわらうとして側へよる故、これはまだ
土がついて ばつちよと いへば のぞいて見
て こわい〜と逃げて行く、

床に入りて、蚊帳の事を思ひ出し、カヤ、ネコ
ガ、アツチへ持つツイッタといふ。

十二月廿三日 能生司さん遊びに来られしに、電
車かいてとせめ、終には、トーサン、カーサン
サ、キセンセイ等 書いて頂く、かへらるゝ時
外套を見て オハヨリといふ

十二月廿四日 今日、父の外套をきて、ネクタ
イを 前掛の上にかけて、中折の帽子をかむり、

コレチツチャイトーサン、イツテマキリマス、
ウエフアースと モトヤマと カステラを買ッ
テクル」といつて 父の外出の時の眞似をなす

幼兒の言語に就きて或人の取調へたる處によれば五千四百
語中各種の語の割合左の如しとぞ

名詞	百分ノ六十
動詞	百分ノ二十
形容詞	百分ノ九
副詞	百分ノ五
代名詞	百分ノ二
前置詞	百分ノ二
間投詞	百分ノ一、七
接続詞	百分ノ〇、三

幼稚園と家庭



談話と手技との結合

和田實

幼稚教育の手段として遊戯、談話、唱歌、手技の
 四種の方面が共に偉大なるものであることは申迄
 もありませんが、今注意して此等の四つが如何に
 連絡して居るかと考へて見ますのに談話の材料と
 しては遊戯の事實が澤山に取られてありますし唱
 歌の材料としては遊戯、談話に關する事柄が澤山
 に採用され又遊戯には唱歌が頗るよく應用されて